

令和2年度
興南中学校
入学試験問題

前期

国語

令和2年1月11日（土）実施 45分／100点満点

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにして下さい。
解答用紙は別になっています。
2. 問題は【一】～【三】まで3題あります。
3. 試験時間は45分です。
4. 解答は解答用紙の所定のところに記入して下さい。
5. 解答は楷書で丁寧に記入して下さい。
6. 解答用紙には、受験番号、小学校名、氏名を必ず記入して下さい。
7. 試験終了後、問題用紙は持ち帰って下さい。

【一】 次の各問に答えよ。

問一 次の文を言い換えたものとして最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

1 作者の意図がストレートに伝わる。

ア 作者の正直な気持ちが単刀直入に伝わる。

イ 作者の正直な気持ちが一進一退に伝わる。

ウ 作者の考えたねらいが単刀直入に伝わる。

エ 作者の考えたねらいが一進一退に伝わる。

2 いたずらに時を費やす。

ア 意味もなく時間が過ぎていく。

イ 意味もなく時間を短くする。

ウ ふざけた調子で時間が過ぎていく。

エ ふざけた調子で時間を短くする。

3 すんなりと読めないかたい文章。

ア スマートには読めないぎこちない文章。

イ スマートには読めない難しい文章。

ウ スムーズには読めないぎこちない文章。

エ スムーズには読めない難しい文章。

問二 次の文中の傍線部の敬語の種類として、最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

- 1 校長があいさつにうかがう。
2 皆^{みな}さま、お静かにお聞きください。

ア 尊敬語 イ 謙譲語 I ウ 謙譲語 II (丁寧語) エ 丁寧語

問三 次のような状態を表す慣用句として最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

- 1 あまりにひどくて黙って見過ごすことができない

ア 目を疑う イ 目にあまる ウ 目に物言わせる エ 目の色を変える

- 2 ものごとに対してとるべき方法がない

ア 手が届く イ 手につかない ウ 手を焼く エ 手が付けられない

問四 次の熟語の構成として最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えよ。

- 1 登校 2 黒板

ア 同じような意味の字を重ねたもの イ 反対の意味の字を重ねたもの

ウ 上の字が下の字を修飾しているもの エ 下の字が上の字の目的語・補語になっているもの

オ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの

問五 次の熟語を否定する（打ち消す）場合、「未」のつく熟語として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 安定 イ 完成 ウ 条件 エ 公式

問六 次の文中の傍線部と同じ漢字を用いる文を、次のア～エから選び、記号で答えよ。

時間をアけて、学習をする。

ア 年がアける。 イ 口をアける。 ウ ドアをアける。 エ 道をアける。

問七 次の俳句に関連する作者と作品の組合せとして最も適当なものを次のア～カから選び、記号で答えよ。

ふる池や蛙飛びこむ水の音

作者…A 正岡子規 B 与謝野晶子 C 松尾芭蕉

作品…D 万葉集 E おくのほそみち F 若菜集

ア A・D イ B・D ウ C・E エ A・E オ B・F カ C・F

問八 次の会話を読んで、後の各問に答えよ。

生徒A…今日の課題は俳句を作ることだよ。でも、私は俳句のことは何もわからないな。

生徒B…俳句の基本は五・七・五の十七音で詠むことと、季語を入れることだよ。

生徒C…季語というのは季節をあらわす言葉だよ。これを必ず入れましょうということだね。

生徒A…そうなんだ。だけど、どうやって作ったらいいかはまだわからないな。

生徒B…それなら、お手本となる作品がいつばい載っている本が必要だね。

生徒C…それよりもどうやって作ったらいいかを教えている本の方が必要だと思うな。

生徒A…私もそう思う。まずはそれを用意することから始めよう。

生徒B…そうだね。それから始めていきましょう。

1 この生徒たちが用意すべき本として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 有名な俳人の歌集

イ 有名な俳句をまとめている本

ウ 有名な俳句を解説している本

エ 俳句の作り方を解説している本

2 1の本を用意すべきとはじめに提案したのはどの生徒か。生徒A～Cから一人選び、記号のみで答えよ。

3 生徒たちの今日すべき活動として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 俳句を作ること

イ 俳句の本を用意すること

ウ どんな本を用意するか決めること

エ 全員で俳句について話し合うこと

※問題は次へ続く

【二】 次の文章を読んで後の各問に答えよ。

枕草子第七十一段「ありがたきもの」(現代語訳)

X¹ 舅¹にほめられる婿¹。また、姑¹に可愛がられるお嫁¹さん。毛がよく抜ける銀の毛抜き。主人の悪口を言わない使用人。変わった癖¹が一つもない人。見た目も心のありようもすぐれていて、この世に長く生きて、なお、全然他から批判¹を受けることのない人。同じ主人に仕えて、宮仕えをしている人で、お互い¹に気をつかって少しも失敗を見せないようにと気を張っていて、とうとう何の落ち度もなくて仕え通すなどは、とても難しいことだろう。物語や歌集を人から借りて書き写している時、借りた本に墨¹をつけないこと。それが上等の紙を使ったリツパ¹な本などだと、たいそう気をつかって書くのだけれども、必ず書き汚¹してしまふ。男でも女でも、同じ。女ドウシ¹でも、いつまでも仲良くしようと思つて付き合つていても、本当に生涯¹仲良く過ごすことは難しい。

この七十一段は、「X」を集めている。个性的で一つひとつは何のつながりもないバラバラな事項¹がこれだけ集められ、並べられているのは大したものだ。

そして、「嫁姑²」の問題や、「無くて七癖²」²といった、千年以上経た現在でもそのまま通用するような事柄¹がある点は驚くべきことなのではないだろうか。

「主人の悪口を言わない使用人」も面白い。今の会社員がお酒を飲みながら、上司や会社の批判¹をする。つまりこれも現代にそのまま通用しそうなことで、平安時代の使用人も令和となった現代の会社員も人情¹という点では全く変わらないらしいさまは当然といえば当然、しかしまたフシギな感じもする。また枕草子の作者である「Y」の人生智¹¹というか観察眼にはきらりと光るものを感じ

枕草子第二十六段「心ときめきするもの」(現代語訳)

Z。雀すずめの子を飼かう時。赤ん坊ほらを遊あそばせている側を通るとき。上等の香をたいて、一人で寝ねそべっているとき。中国から入ってきた高価な鏡の少し映りが悪くなってきたもの。ハンサムな男が家の前で車を止めて、案内を頼たのみ、うちの使用人に何事かたずねさせている時。髪かみを洗い、化粧けしやうをしていいにおいの香をしみ込ませた着物を着たとき。別に誰だれも見人がない場所でも、自分の気持ちだけで、なお十分に楽しい。やってくる恋人こいびとを待つ夜なんか、ひどい雨風で建物がガタガタなっているのも、あ、来たかも、と、音のたびにはっとしてしまふ。

この段で際立つ特ちょうは、作者の女性性だ。枕草子を読んでいると、作者の勝ち気で積極①的、物事をズバリと割り切って考える男性的な人なのではないかと感じられる場面がよくある。

しかし、特に乳幼児や小さな生き物を見るとついその可愛さに引き寄せられ、見入ってしまう女性的母性的な面もまた感じられる。そして、女性としての自分の感性を大切にしながらも、女性のあり方という問題について大きな関心いを抱いだいていることを示す段も少なくない。

Y という人は、その両面②を持ち合わせる、豊かな人間性の持ち主であったようだ。読み進めるうちにおのずと行間からにじみ出る作者のありようや人柄ひとがらを感じ取れることもまた、枕草子の楽しみである。

枕草子第二十二段「すさまじきもの」、第二十六段「心ときめきするもの」、第七十一段「ありがたきもの」、これらの章段を見て感じることは、とにかく、文学作品としてはずいぶん風変ふうがわりな書き方で書かれているということだ。

では、その書き方を見よう。

まず、「ありがたきもの」とか「心ときめきするもの」といった、テーマが明示される。そして、そのテーマに沿うものやふさわ

しい事柄がずらりと並べられる。

読んでいて驚くのは、並べられる項目の多様性だ。^{*3}並べられる項目はすべて、たしかに提示されたテーマに沿うものだ。しかし、挙げられたそれぞれはバラバラで、隣り合う項目ドウシには全く何のつながりもない。よくこれだけ次から次へと、変わったことや面白いことを思いつくものだとあきれ、もちろん感心し、しまいには感動してしまう。

誰でも一応まねはできる。テーマを考え、そのテーマに沿う項目の二つや三つを並べることは簡単だ。しかしやれることはそこまです。
で。
Y ほど数多くの項目を思いつくことはとてもできないだろう。

しかも、ただ例をたくさん挙げればそれでいいというわけではない。並べられた事項の一つ一つが特色をもち、なるほど人をおもしろがらせるようなものでなければならぬのだ。^③こんなことのできる人は、まずいない。それより何より、こんなことをしようと思いつく人、こんなことをすればおもしろいだろうと思いつく人、それ自体が多分いない。

へ i へ、言い換えれば、こういった発想そのもの、そしてこのような書き方で書かれた文、これらは文学作品としてもものすごく珍しい、突出して風変わりなものだということだろう。

風変りなのは、枕草子の他の章段と比較してもいえることだ。枕草子には、「見聞・経験・感想などを気の向くままに記した」随想段と「設定されたテーマに沿って同じような事柄を書き並べた」類想段がある。この二つの書き方を比べると、どう見ても別種の書き方だとしなないわけにはいかない。

ここから、フシギな、奇妙な結論が導き出されてくる。つまり、^{*4}「すさまじきもの」「心ときめくもの」「ありがたきもの」という章段は随筆としての枕草子からはみ出してしまいそうな書き方で書かれた文章だとせざるを得ないということである。

Y は、どうしてこんな風変りな文を枕草子の中に書き込んだのだろうか。何からヒントを得たのか。大いに追究したいが、も

う一つ、興味をひかれることがある。それは、これらの章段の技術面である。例としてあげた三つの章段のテーマは、思いつくまま、ごく無造作*5むぞうさきdにキガルキガルに設定されているように見える。へ ii へ、よく考えるとそんなはずがなく、実はよくよく考えたうえでテーマを選んだに違ちがいない。

つまり彼女は、自分のよく知る分野、普段ふだんから興味を持って観察を重ねてきたテーマ、それについてたくさん面白い事項を並べることができテーマを選んで、そこでそれぞれの段を立ち上げただろうということだ。

普段から周囲のものごとを注意深くみていて、日常のごくありふれた雑事の中からいくつでも、キラリと光る興味深い物事を見つけ出すことができるようであれば、とてもこういう作業はできないだろう。普通程度の注意力や観察力、また集中力しか持たない人間にやれる仕事ではない。

Y はこのような作業が好きで、得意だったようだ。枕草子の中に出てくる、数多い楽しい事例を見ていると、嬉々*6ききとして次々と熱心に書いた様子がうかがえる。Y は、こういった仕事をおもしろがり、なおかつ楽々とやっけてのける能力に恵めぐまれていたに違いない。思えば実が変わった能力だ。きわめて珍しい才能だといえると思う。

【語注】

【 野呂俊秀 『枕草子を読み直す』 幻冬舎ルネッサンス新書 ※問題作成の都合上、一部改変 】

*1 舅 夫または妻の父、続く姑は夫または妻の母

*2 嫁姑問題 もともと他人である嫁と姑が家族になることでいざこざが起きやすくなる問題

*3 多様性 種類が多いこと、さまざま

*4 すさまじきもの おもしろくないもの、ここでは述べられない章段

*5 無造作 たやすく物事を行うこと、手間をかけないこと

*6 嬉々 うれしそうに笑い楽しむ様子

問一 二重傍線部 a↘d のカタカナを漢字に直して答えよ。

- a リツバな本 b 女ドウシでも、 c フシギな感じもする d キガルに設定されている

問二 傍線部①「積極的」の対義語を漢字で答えよ。

問三 X・Zに入る言葉を現代語訳と筆者の考えを参考にして、次のア↘エから選び、それぞれ記号で答えよ。

- ア 感謝するべきもの イ めったにないもの ウ 胸がときめくもの エ 心配してしまうもの

問四 Yに入る枕草子の筆者名を次のア↘エから選び、記号で答えよ。

- ア 紫式部 イ 小野小町 ウ 清少納言 エ 紀貫之

問五 Yはどのような人物だと筆者は述べているか。適当でないものを次のア↘エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 豊かな人間性をもちあわせる人物 イ 観察力や注意力のある人物
ウ 明るい人柄で誰からも好かれる人物 エ 人とはちがう発想をもつ人物

問六 傍線部②「その両面」とはどのような面とどのような面のことか。次の（1）・（2）に当てはまる語句を、それぞれ字数条件に注意し、本文中から抜き出して答えよ。

（1＝三字）な面と（2＝六字）な面

問七 枕草子の冒頭部分として正しいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、ひさしくとどまりたるためしなし。

イ つれづれなるままに、ひくらし硯すずりに向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

ウ 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少しあかりて紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月のころはさらなり。

エ いづれの御時おんときにか、女御・更衣こうついあまたさぶらひ給たまひけるなかに、いとやむごとなき際きわにはあらぬが、すぐれて時ときめき給たまふありけり。

問八 へ i へ・へ ii へに入る接続詞として最も適当なものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア そして

イ つまり

ウ しかし

エ また

問九 傍線部③「こんなこと」が指し示す内容を説明した文の、(1) (3) に当てはまる語句を、それぞれ字数条件に注意し、本文中から抜き出して答えよ。

それぞれが (1 || 二字) をもち、(2 || 十三字) 例を (3 || 六字) ること。

問十 本文の内容として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 枕草子は平安時代に書かれた随筆であるが、その内容はとても風変りで、当時の人々にはなかなか受け入れられなかった。

しかし、現代になり、女性の社会進出が進んだことから、今では高い評価を得るにいたっている。

イ 枕草子は平安時代に書かれた随筆であるが、その内容はとても面白く、現代にも通じるエピソードが多々ある。そして、その作者は、読み手がおもしろいと思うような様々な事例をあげることができる知性を持っている。

ウ 枕草子は、読んでみると文学作品としてはかなり風変りなものであるといえる。そして、それを作り上げた作者自身の経験が盛り込まれていることから、作者もまた平安時代の女性としては変わり者だと評価されている。

エ 枕草子は、読んでみると文学作品としてはいたって普通の作品であるといえる。それは、当時の出来事をテーマに沿って列挙していただけだからである。しかし、作者については、書き方の工夫という点において評価できる。

※問題は次へ続く

【三】次の文章を読んで後の各問に答えよ。

以前から、「私」はある友人を介して知り合った、マテイラム・ミスラさんと交流がありました。彼は、ハッサン・カンという名高いバラモンの秘法を学んだ、インド出身の年の若い魔術の大家です。何度か政治や経済について議論したことはあったものの、魔術を見たことがなく、今夜は前もって魔術を使って見せてくれるよう、手紙で頼んでおいてから、彼の自宅に行き、夢のような魔術の数々を見せてもらいました。

「いや、かねがね評判はうかがっていましたが、あなたのお使いなさる魔術が、これほどふしぎなものだろうとは、実際、思いもありませんでした。ところで私のような人間にも、使って使えないことのないと言うのは、ご冗談ではないのですか。」

「使えますとも。誰にでも造作なく使えます。ただ——」と言いかけてミスラ君はじっと私の顔を眺めながら、いつになく真面目な口調になって、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術を習おうと思ったら、まず欲を捨てることです。あなたにはそれが出来ずか。」

「出来るつもりです。」

私はこう答えましたが、何となく不安な気もしたので、すぐにまた後から言葉を添えました。

「魔術さえ教えて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑わしそうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押しはぶしつけだとも思ったのでしよう。や

がて大様にうなずきながら、

「では教えてあげましょう。が、いくら造作なく使えると言っても、習うのには暇もかかりますから、今夜は私の所へお泊りなさい。」
「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教えてもらいうれしさに、何度もミスラ君へお礼を言いました。が、ミスラ君はそんなことにとんちやくする気色もなく、静かにイスから立ち上がると、

「オバアサン、オバアサン。今夜ハオ客様ガオ泊リニナルカラ、寢床ノ仕度ヲシテオイケレ。」

私は胸をおどらしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を浴びた、親切そうなミスラ君の顔を思わずじつと見上げました。

私がミスラ君に魔術を教わってから、一月ばかりたった後のことです。これもやはりざあざあ雨の降る晩でしたが、私は銀座のあるクラブの一室で、五六人の友人と、暖炉の前へ陣取りながら、きがるな雑談にふけていました。

何しろここは東京の中心ですから、窓の外に降る雨あしも、ひっきりなく往来する自動車や馬車の屋根をぬらすせい、あの、大森の竹やぶにしぶくような、ものさびしい音は聞えませんが、もちろん窓内の陽気なことも、明るい電灯の光といい、大きなモロッコ皮のイスといい、あるいはまた滑らかに光っている寄木細工の床といい、見るからに精霊でも出て来そうな、ミスラ君の部屋などは、まるで比べものにはならないのです。

「今夜は一つ僕たちの前で使ってみせてくれないか。」

「いいとも。」

私はイスの背に頭をもたせたまま、さも魔術の名人らしく、おうへいにこう答えました。

「じゃ、何でも君に一任するから、世間の手品師などには出来そうもない、ふしぎな術を使って見せてくれたまえ。」
友人たちはみな賛成だと見えて、イスをすり寄せながら、うながすように私の方をながめました。そこで私はおもむろに立ち上がつて、

「よく見ていてくれたまえよ。僕の使う魔術には、種も仕かけもないのだから。」

私はこう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖炉の中に燃えさかっている石炭を、無造作にてのひらの上へすくい上げました。私を囲んでいた友人たちは、これだけでも、もう荒胆を挫がれたでしょう。皆顔を見合せながらうっかり側へ寄つて火傷でもしては大変だと、気味わるそうにしりごみさえし始めるのです。

そこで私の方はいよいよ落着き払つて、そのてのひらの上の石炭の火を、しばらく一同の眼の前へつきつけてから、今度はそれを勢いよく寄木細工の床へまき散らしました。そのとたんです、窓の外に降る雨の音を圧して、もう一つ変わった雨の音がにわか床の上から起こったのは、と言うのはまっ赤な石炭の火が、私のてのひらを離れると同時に、無数の美しい金貨になって、雨のように床の上へこぼれ飛んだからなのです。

友人たちは皆夢でも見ているように、ぼうぜんとかっさいするのさえも忘れていました。

「まずちよいとこんなものさ。」

私は得意の微笑を浮かべながら、静かにまた元のイスに腰を下ろしました。「ざっと二十万円くらいはありそうだね。」

「いや、もつとありそうだ。きゃしゃなテーブルだった日には、つぶれてしまうくらいあるじゃないか。」

「何しろ大した魔術を習ったものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」

「これじゃ一週間とたたない内に、岩崎や三井にも負けられないような金満家になってしまふだろう。」などと、口々に私の魔術をほめ

そやしました。が、私はやはりイスによりかかったまま、悠然と葉巻の煙をはいて、

「いや、僕の魔術というやつは、一旦欲心を起こしたら、二度と使うことが出来ないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまった上は、すぐにまた元の暖炉の中へほうりこんでしまおうと思っっている。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言い合わせたように、反対し始めました。これだけの大金を元の石炭にしてしまうのは、もったいない話だと言うのです。が、私はミスラ君に約束した手前もありますから、どうしても暖炉にほうりこむと、剛情に友人たちと争いました。すると、その友人たちの中でも、一番狡猾だという評判のあるのが、鼻の先で、せせら笑いながら、

「君はこの金貨を元の石炭にしようと言う。僕たちはまたしたくないと言う。それじゃいつまでたつた所で、議論が干ないのは当たり前だろう。そこで僕が思うには、この金貨を元手にして、君が僕たちとカルタをするのだ。そうしてもし君が勝つたなら、石炭にするとも何にするとも、自由に君が始末するがいい。が、もし僕たちが勝つたなら、金貨のまま僕たちへ渡したまえ。そうすれば互いの申し分も立って、至極満足だろうじゃないか。」

それでも私はまだ首を振って、容易にその申し出しに賛成しようとはしませんでした。ところがその友人は、いよいよあざけるような笑を浮かべながら、私とテーブルの上の金貨とをずるそうにじろじろ見比べて、

「君が僕たちとカルタをしないのは、つまりその金貨を僕たちに取られたくないと思うからだろう。それなら魔術を使うために、欲心を捨てたとか何とかいう、せっかくの君の決心もあやしくなってくるわけじゃないか。」

「いや、何も僕は、この金貨がおしいから石炭にするのじゃない。」

「それならカルタをやりたまえな。」

何度もこういう押問答を繰返した後で、とうとう私はその友人の言葉通り、テーブルの上の金貨を元手に、どうしてもカルタを闘

わせなければならぬ羽目に立ち至りました。もちろん友人たちは皆喜びで、すぐにカルタを一組取り寄せると、部屋の片隅にあるカルタ机を囲みながら、まだためらいがちな私を早く早くとせき立てるのです。

ですから私も仕方がなく、しばらくの間は友人たちを相手に、いやいやカルタをしていました。が、どういうものか、その夜に限って、ふだんは格別カルタ上手でもない私が、嘘のようにどんでん勝つのです。するとまた妙なもので、はじめは気のりもしなかったのが、だんだん面白くなりはじめて、ものの十分とたたない内に、いつか私は一切を忘れて、熱心にカルタを引き始めました。友人たちは、元より私から、あの金貨を残らずまき上げるつもりで、わざわざカルタをはじめたのですから、こうなると皆あせりにあせって、ほとんど血相さえ変わるかと思うほど、夢中になって勝負を争い出しました。が、いくら友人たちが躍起となっても、私は一度も負けないばかりか、とうとうしまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金高だけ、私の方が勝ってしまったじゃありませんか。するとさっきの人の悪い友人が、まるで、くるったような勢いで、私の前に、札をつきつけながら、

「さあ、引きたまえ。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家作も、馬も、自動車も、一つ残らずかけてしまおう。その代わりに君はあの金貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引きたまえ。」

私はこの刹那に欲が出ました。テーブルの上に積んである、山のような金貨ばかりか、せつかく私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、みな相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向こうの全財産を一度に手に入れることが出来るのです。こんな時に使わなければどこに魔術などを教わった、苦心の甲斐があるのでしょうか。そう思うと私は矢も楯もたまらなくなつて、そつと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引きたまえ。」

「九。」

「キング。」

私は勝ちほこった声を挙げながら、まっ蒼さおになった相手の目の前へ、引き当てた札を出して見せました。するとふしぎにもそのカルタのキングが、まるで魂たましいがはいったように、かんむりをかぶった頭をもたげて、ひよいと札の外へ体を出すと、行儀ぎようぎよく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮べて、

「オバアサン。オバアサン。お客様ハオ帰りニナルソウダカラ、寢床ノ仕度ハシナクテモイヨ。」

と、^⑥聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降る雨あしまだが、急にまたあの大森の竹やぶにしづくような、寂さびしいざんざり降りの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見まわすと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであのカルタのキングのような微笑を浮べているミスラ君と、向い合ってすわっていたのです。

私が指の間にはさんだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっている所を見ても、私が一月ばかりたったと思ったのは、ほんの三分の間に見た、夢だったのに違いありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間だということは、私自身にもミスラ君にも、明らかになってしまうのです。私ははずかしそうに頭を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業が出来ていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな眼つきをしながら、縁ふちへ赤く花模様もようを織り出したテーブル掛の上にひじをついて、静かにこう私をたしなめました。

【語注】

*1	バラモンの秘法	インドの僧侶 <small>そうりよ</small> の中でも最高位についた者しか使うことができない術	*13	カフス	ワイシャツやブラウスの袖口 <small>そで</small> の布
*2	大家	ある分野で特にすぐれた知識や技術をもっている人	*14	荒肝を挫がれた	ひどくおどろいた
*3	造作なく	手間がかからず、簡単であること	*15	かつさい	声をあげてほめそやすこと
*4	ぶしつけだ	礼儀 <small>れいぎ</small> をわきまえていないこと	*16	きゃしゃ	ほっそりとして弱々しいこと
*5	大様	ゆつたりとしていて大らかな様子	*17	岩崎やく金満家	岩崎や三井のような財閥 <small>ざいばつ</small> の金持ち
*6	とんちやくする	物事を気にかけてこたわること	*18	悠然と葉巻の煙く	ゆつたりとタバコの煙を
*7	葉巻	タバコの葉を棒状に巻いたもの	*19	狡猾	悪がしこくてずるいこと
*8	銀座のあるクラブ	東京を代表するにぎわった場所にあるお酒やダンス音楽を楽しむ店	*20	せせら笑い	ばかにして笑うこと
*9	雨あし	長くすじを引いて地に落ちる雨	*21	議論が干ない	議論がおわらないこと
*10	モロッコ皮	モロッコ特産のやぎ皮で作った皮製品	*22	カルタ	小さい長方形の厚紙の遊具、ここではトランプのこと
*11	寄木細工	色や木目の異なる木片 <small>こ</small> を組み合わせて作る工芸品	*23	あざける	人をばかにするような様子
*12	おうへい	人を見下したような様子	*24	躍起となつて	あせつてむきになつて
			*25	金高	金額 <small>きんがく</small>
			*26	地面も、家作も	所有している土地も家も
			*27	刹那	短い時間、瞬間
			*28	矢も楯もくなくなつて	いちずな気持ちをこらえられず

問一 二重傍線部 a と d の漢字の読みを答えよ。

a 真面目な口調

b 気色もなく

c 雑談にふけて

d 容易にその申し出しにく

問二 傍線部①「さすがに」が修飾する部分として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア この上

イ 念を押すのは

ウ ぶしつけだとも

エ 思ったのでしよう

問三 傍線部②「もう一つ変わった雨の音」とは何の音か。次の説明の (1) ・ (2) に当てはまる語句を、それぞれ字数条件に注意し、本文中から抜き出して答えよ。

(1 || 八字) が (2 || 十字) 音

問四 傍線部③「私はミスラ君に約束した」について、私はミスラ君とどのようなことを約束していたのか。本文中から九字で抜き出して答えよ。

問五 傍線部④「熱心にカルタを引き始めました」とあるが、なぜそのようなになったのか。その理由を説明したものととして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア いつもはそれほど勝つわけではないのに、どんどん勝っていきおもしろくなったから。

イ いつもは負けてばかりいたのに、魔術によって力を得て勝ち続けたから。

ウ いつもとは違う人たちとカルタをしたので、手の内が読まれていなかったから。

エ いつもとは違い、金貨がかかっていたので、どうしても勝ちたいと思ったから。

問六 傍線部⑤「そつと魔術を使い」とあるが、その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 習得した魔術を使う機会がこれまでなく、その機会を逃したくないと思ったから。

イ 人の悪い友人をこらしめるために魔術を使わなければ、習得した意味がないから。

ウ せっかく勝って山のような金貨を得たのに、その金貨を石炭に戻すのがおしくなったから。

エ 苦心して習得した魔術を使えば、自分の勝ち分だけでなく相手の全財産も手に入るから。

問七 傍線部⑥「聞き覚えのある声」とあるが、誰の声だと考えられるか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア お婆さん イ ミスラ君 ウ キング エ 友人の一人

問八 本文の内容は三つの場面に分けることができる。第二の場面、第三の場面の最初の五字をそれぞれ本文中から抜き出して答えよ。

問九 本文の で囲まれた部分に用いられている表現技法として、最も適当な組み合わせを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 対句法・直喩法 イ 対句法・隱喩法 ウ 直喩法・オノマトペ エ 隱喩法・オノマトペ

問十 芥川龍之介の他の作品として正しいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 走れメロス イ 銀河鉄道の夜 ウ トロツコ エ 吾輩は猫である

※問題は以上